

第4回館長講座 タイ・バンドンブロン遺跡の調査

バンドンブロン遺跡の調査は1990年10月より11月末まで現地での発掘、その後12月から分担者の所属するコンケン大学で整理作業を行なった。

ブリラム市内の宿舍を朝7時半発、午後6時帰着のペースで、遺跡まで50km、約1時間の通勤時間である。

調査メンバー(肩書きは当時)

- 新田栄治 鹿児島大学助教授
- 西谷 大 国立歴史民俗博物館助手
- 大貫静夫 東京大学助手
- 大貫浩子 大貫氏夫人
- 鷹野光行 お茶の水女子大学助教授
- チャイカンチット・チャリ コンケン大学 講師
- ほかにインスペクターとして、パエさん
- 芸術局から派遣された タサナ氏

新田さんは大学の同級生。ちなみに同級生は4人で、そのうちの二人と一緒に大学院に進学し、その後、千葉縣市原市の国分寺台遺跡発掘調査団(ここは私が誘った)、イランの調査にも一緒だった。鹿児島大学に行って、東南アジア考古学を本格的にやるようになり、タイの先史時代遺跡の生産遺跡の発掘を通じて業績を上げていき、後東南アジア考古学会会長などを務めた。このときは私にとってはイタリアの調査がなかなか再開されなかったので、新田さんのお手伝いのつもりで参加した。

東北タイ南部のブリラムからスリンにかけての広大な水田地帯であるトゥンクラロンハイ地域が開発されたのは最近のことで、先史時代には存在しなかった。このような稲作不向きな地域であれば人口密度が少ないのが普通だが、新石器時代以来、歴史時代にいたるまで、相当数の遺跡が分布しており、生態的条件と遺跡数のギャップに説明が必要となってきた。この不利な条件の克服のために、塩と鉄を生産することによる適応戦略がとられた。鉄鉱石とともに、ラテライトの鉄イオンが土中の粘土粒に凝集して、酸化鉄の外皮を形成したきみょうな粒が製鉄の原料として使われており、このような製鉄遺跡も分布している。この製鉄のおこなわれていたことを証明する目的で調査がおこなわれた。

バンドンブロン村の遠景

バンドンブロン村は三重の濠と土塁に囲まれた、現在は約900人が住む村である。

東北タイの先史時代の遺跡は地上にマウンド状をなしており、その周囲をめぐる濠をもつものが多い。マウンドは人工的に盛り上げられた結果であり、環濠も人為的に掘ったものである。雨季に年間降雨量のほとんどが降るこの地域では、住居が水没しないように高

くする必要があり、また過剰の水を貯水し、乾季の生活用水の枯渇に備えて環濠が必要だった。新田さんは 1987 年 4 月にここを初めて訪れたが、11 月に再訪したさい、村民の鉄滓採取現場に偶然ゆきあい、鉄滓堆積層の下から製鉄炉らしいものと木炭が出たのに気づいた。それがきっかけで、この場所を発掘地を選んだ。

バンドンブロン村あれこれ

雨期には道が洪水で川になるそうで家は高床。水瓶は雨水をためておくため。村の周りには周濠があり、そこから水くみもする。こどもたちの遊び場にもなる。

タイの東北地方は絹織物の産地で、村の中でも機織りがされていた。ちょうど米の収穫と脱穀風景も見られた。水牛と共に生活をしている。

村のあるテルの遠景

上の方やや左に家が見える（バナナの木の下）これが丘の頂上バナナの下に白っぽく見えるところは削られた垂直の壁。

発掘予定地

テルが工事で切り取られて断面がでていた。その地表には土器片が散布している

まず切られたテルの壁をきれいにするとところから始めた。これはテルの土層の状況を調べようとしたため。

発掘区を設定

まったく幸運なことに、発掘開始当日に製鉄炉の遺構がまとまって検出された。その後、次々に炉が検出され、総数 17 基の炉と、焼土、フイゴ羽口の破片、鉄棒などがぎっしり詰まったゴミ捨て穴 1 基、付属の建物と思われるもの 1 棟、多数の柱穴が検出された。

昼食

昼食は市内の食堂と契約し、発泡スチロールの弁当箱入りの弁当を毎朝積み込み、氷を詰めた大形バケツに瓶詰水を入れて通った。

右下は発掘終了後の打ち上げの会。缶ビールを買ってきて振る舞ったが、中には缶ビールの開け方のわからない人もいた。まだ普及していなかったのだろう。

製鉄炉

発掘の結果、製鉄に関連する炉 17 基、製鉄関連塵芥廃棄穴 1 基、建築遺構 1 基を検出した。粘土製のフイゴ羽口の破片、粘土壁破片、炭化木材、土器片、大量の鉄滓、工人の食料であったと推定される大形動物骨なども出土した。また、製鉄遺構よりも下層から埋葬人骨 6 体、嬰兒埋葬人骨が 1 体出土。

炉は粘土で壁を築いた円筒形の炉心部とフイゴ羽口および排滓壙(製鉄の過程で炉内に生じた不純物であるスラグを排出するための穴)の三部分から成るものと、炉心部と羽口の二部分から成るものとの2種類がある。前者が製鉄炉、後者が精錬炉と考えられる。

最も残りのよかった炉

ほぼ完全に残った炉心部と排滓壙があり、厚さ10cm位の粘土壁が「コ」字形に炉心部を囲んでいる。粘土壁の一端には粘土で被覆された柱が残っていた。炉の周辺の床面には粘土を貼って作業面を形成していた。この粘土壁は作業効率をよくするために、工人を高熱から防御するための装置であり、柱はまた粘土で被覆することにより防火対策がとられていた。発掘した範囲では鉄製品は1点も発見されず、鉄素材を製品に加工する鍛冶炉もなかった。したがって、ここでは製鉄とそれに続く精錬が行われ、鉄素材としてインゴットの状態で他の場所に搬出されたようである。バンドンプロンの製鉄遺跡は出土した土器の編年観と放射性炭素年代の測定結果により、前3・2世紀ころと推定した。

遺物洗いなど

発掘作業の傍ら、出土した土器片などをその場で洗っていった。

人骨出土で

10月末に最初の人骨が出てから大騒動となり、芸術局の担当者が来て、歴史公園化したとの意向を聞かされた。彼が報道機関に取材するように通報したため、TV、新聞の報道合戦となった。製鉄遺構を発掘しているときにはまるで興味を示されなかったのに、調査目的ではない人骨が出たらとたんに考古課や世間の注目を浴びるようになった。報道後、連日200人前後の見物客が近郷近在からやってくるようになり、黄金が出たとか、すごいウワサが飛び交った。

また、TVを見たバンコクのある教師が「日本人が無断で発掘して、出土品を持ち出している」と想像力を働かせて警察に通報したため、サトゥクの警察や教育委員会の役人に取調べられた。芸術局の許可証もあり、芸術局派遣の連絡官も我々に同行しているし、知事や郡長にも会い、知事からの文書もあるのに。

昼休みの時に警察がやってきて我々を監視していた。警察官は弁当を食べている間ずっと横に立っている。目が合うとニコッとするのだが、そのニコッの冷たいこと。水を飲むために動くとまたニコッとしながらついてくる、という案配。バンコクからやってきた我々が悪いことをしていると信じていた人たちは平気でトレンチの中に入り歩き回っていた。

あとで聞いた話だが、警察が来た背景には村の村長派と反村長派の対立がからんでいたらしい。作業員さんを頼むのに村長を通じて依頼したが、そうすると村長派の人が雇われ、その人たちには短期間であっても現金収入があることになる。それが反村長派のやっかみを買ったとか。

中学校の郷土史学習の野外教場

ついには中学校の郷土史学習の野外教場ともなり、先生に引率された生徒が3～400人やってきて、説明や案内をすることにもなった。新田さんはタイに来て、生まれて初めてのテレビ出演をした。その後日本ではTBSの『世界不思議発見』などには出演されています。サトック文化センターの郷土史学習ビデオ録画取りにも登場して、発掘のことを解説することにもなった。盗掘者にされたり、テレビ解説者にされたり、先生にされたり、見物客整理係になったり。なんであれ、見物客がいることは掘っている者にとっても楽しいものである。それにしても、製鉄遺構のほうがはるかに重要な価値をもつのだが。

下層の埋葬墓

製鉄遺構出土層より下の層からは、計6基の伸展葬が検出された。木棺の存在を初めて明確に検出したことは大きな成果である。はば長方形の墓坑内に南を頭位として伸展葬で葬られる。いずれも両腕に幅広の青銅腕輪1個ずつをつけ、胸の上に細身の青銅環を1個置いている。なかには、多数の青銅指輪をはめているものもあった。

最も注目されるものは、他と違って頭位を北にした壮年男性人骨である。頭部は粘土で覆い、出土したときには平たくつぶれていた。顔は土器の破片で覆って隠している。縞めのうの管玉10個、藍色ガラス小玉3個、緑色ガラス小玉28個を連ねたネックレスを首に掛け、両腕に幅広の青銅腕輪3個ずつ、右手に3個の青銅環を、左手指から外れて青銅指輪1個、胸の上に青銅環1個があった。また、墓坑足元小口に八ツ橋のような形の粘土壁を検出したが、これは丸太を半裁してくり抜いた木の蓋が墓坑の上にあった証拠である。他を圧する装飾品の豪華さ、頭位が他のものと違うことなど、この男性がチーフであったことを示すものであろう。

これのでたと、夕方町を歩いていたら、バナナを売っている露店があった。バナナを焼いて板で上下から挟み、ぴしゃっと合わせて平たくして売っていた。それを見た私と西谷さんは顔を見合わせて、アレだ、と異口同音でした。

嬰兒埋葬骨

縞めのう管玉ネックレスをつけ、象牙かと思われる腕輪を両腕にはめた嬰兒の埋葬墓である。

出土遺物の処理

発掘現場で洗い、出土地点や層位ごとに袋に入れて博物館に持って行ったところ、どうしてこんなに破片まで持ってくるのだ、といわれ、博物館に収蔵するのは完形品やそれに近いものだけでよい、ほかは発掘現場に戻してこい、という指示。私たちの出土遺物についての認識と全く違うので面食らった。遺物の持って行き場がないのでやむなくその指示に従ったのだが…。